

## 夏やすみ後

夏やすみが残して行つてくれた雑草が園一ぱいに蔓延はびこっている。お山の上にも、砂場のまわりにも、花壇の後ろにも、人跡まれなる大原野の眺め茫茫と茂っている。おいしば、めいしば、あれちのぎく、おおばこ、とぼしがら、のびえ、かたばみ、むらさきかたばみ、その間をこおろぎが飛ぶ、ばったが飛ぶ、ここ暫くは雑草主義遊園の理想の時。

## 中略

とにかく子供は大喜びである。半ズボンの膝を没する雑草の間を駆け回って、きゃっきゃつと言つてばったを追うている。みずひきの赤いのをしごいて来て、小さな紙きれに包んだり、あおぎりの実をむしって葉に盛ったり、おままごとの御馳走はいくらでもある。お庭でも、公園でも、幼稚園でも、草は見るもの、花は眺めるもの、その、見て眺めてじかして触るべからずときまつている草が、ここで

は遠慮なくふんだんにむしつてよいのである。当分は別に玩具も何もいらぬ。この雑草こそ、自由自在の玩具である。恩物である。

可愛そうな都会の子供たちは、この雑草を特別の賜物のように喜んでゐる。自分たちの生活に必然の世界としていながらも自然が与えてくれる野も知らず、山も知らず、そこで遊んだ先祖たちの幸福も知らず、たまたまの夏やすみを利用して、自然が辛うじて与えてくれたこの雑草に、渴けるものが水を得たように喜んでゐる。そして年に一度ずつのこの雑草に、真におもしろい遊園の楽しさを享けている。

年にたった一度でも、この雑草のある幼稚園は幸いな幼稚園である。一日でも多くこの雑草を刈らずに置いて下さる先生は感謝すべき先生である。

(倉橋惣三選集 第二巻 幼稚園雑草より)